イエスを愛する者となる　　ヨハネ 21:15～17

イエスが復活してから一週間ほどエルサレムにいた弟子たちは、ずっとそこにはとどまらず、いったんガリラヤに帰りました。距離にしておよそ 100Km ぐらいです。弟子たちがガリラヤに帰ったのは、彼らの判断によってではなく、イエスの導きによってでした。み使いたちは、墓にやってきた女の弟子たちに「ですから急いで行って、お弟子たちにこのことを知らせなさい。イエスが死人の中からよみがえられたこと、そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれ、あなたがたは、そこでお会いできるということです。」（マタイ 28:7）と言っており、復活したイエスご自身も彼女たちに「行って、わたしの兄弟たちに、ガリラヤに行くように言いなさい。そこでわたしに会えるのです。」と語っておられます。弟子たちをガリラヤに帰したのはイエスでした。ほんとうなら弟子たちはすぐにでもガリラヤに向かうべきだったのですが、ユダヤの指導者たちを恐れて、ガリラヤへの旅行をためらっていたのです。では、なぜ、イエスは弟子たちをガリラヤに帰したのでしょうか。ふたつの理由がありました。ひとつは、弟子たちを休ませるためであり、もうひとつは、弟子たちに再出発の機会を与えるためでした。

1.弟子たちを休ませるイエス

弟子たちが、エルサレムで過ごした数週間は、波乱万丈の数週間でした。彼らは、おそらく、エルサレムでの数週間を何ヶ月もそこにいたかのように長く感じたことでしょう。弟子たちは、イエスと共に過ごし、イエスの力を見てきました。この方こそユダヤの王となって人々を救ってくれるにちがいないと信じていました。エルサレムに入った時には、その期待が最高潮に達しました。ところが、その期待は裏切られ、こともあろうにイエスは十字架でその最期をとげたのです。弟子たちは、失望と悲しみのどん底に叩き落されました。しかし、弟子たちの悲しみと嘆きは、日曜日には驚きと喜びに変わりました。イエスは復活されたのです。エルサレムでの数週間、弟子たちはまるでジェットコースターに乗っているかのように喜びの最高潮と悲しみのどん底を経験したことでしょう。キリストの十字架と復活という、まさに歴史の中心となる大きな出来事を体験して、弟子たちの心は興奮していましたが、同時に疲れてもいました。それでイエスは、彼らに休みを与えるため、弟子たちをガリラヤに導いたのです。

ガリラヤ地方は、弟子たちの出身地でした。そこはエルサレムのような都会とは違って緑が多く、静かでのんびりとしたところです。あまりにも多くのできごとを次々と体験した弟子たちにとって、なつかしいガリラヤ湖のそよ風は、彼らの疲れをいやしたことでしょう。イエスは、伝道をはじめたころ、弟子たちが食事をするひまもなく忙しくしているのを見て、弟子たちに「さあ、あなたがただけで、寂しい所へ行って、しばらく休みなさい。」（マルコ 6:31）と言われたことがあります。イエスは、人間の弱さをよく知っています。主の配慮はとても現実的です。イエスは、弟子たちに休みが必要なのを知っていて、それを与えたのです。イエスは主であり、私たちはそのしもべです。ある意味、神はすべてを支配されているのでイエスには私たちを奴隷のように働かせる権利もあるのですが、イエスは決してそのようなことはしません。疲れきった者たちには、必要な休みを与えてくださるのです。

今日、私たちの生きている社会はとても要求的です。「さあ、これだけの勉強をしなさい、これだけの業績をあげなさい、これだけの生活水準を保ちなさい、これだけ体重を減らしなさい。健康を保つためにこれだけのことはしなさい」などと、たえず私たちに要求を突きつけてきます。そして多くの人はそうしたプレッシャー、ストレスにあえいでいます。こころの重荷をおろすことのできる場所、たましいの休み場が必要とされています。そして、その休み場はイエス・キリストにあります。イエスは言われました。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ 11:28）「私は、毎日の生活と仕事で精一杯なのに、この上、キリストを信じて従うなどという重荷は負いたくない。」と言う人もいますが、イエスを信じることは、重荷を負うことではなく、むしろ、重荷をおろすということです。イエス・キリストを信じた私たちは、そのことを今、体験

しています。

イエスは続けてこう言われます。「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」（マタイ 11:29-30）「くびき」というのは、文字どおり、首にかける木のことです。たいていは、これを二頭の牛にかけ、そこに鋤や鍬をとりつけて、畑を耕すのです。しかも、若い牛にくびきをかける時には、かならず、もう一頭の牛は、くびきに慣れた牛にするとのことです。くびきに慣れた牛が、未熟で若い牛を導いて、疲れないようにしてくれるのです。キリストは、このくびきに慣れた牛のように、私たちのくびきの一方を担いでくれるのです。どの人にも人生の重荷があり、どうしても自分が負わなければならないくびきがあります。しかし、キリストのくびきを負うなら、今までひとりで背負ってきた重荷が一度に軽くなるのを体験することができるでしょう。イエスのもとに行って休み、重荷を軽くしていただきましょう。

2. 再出発の機会を与えるイエス

さて、イエスが弟子たちをガリラヤに導いたもうひとつの理由は、弟子たちに新しい出発をさせるためでした。ガリラヤは、弟子たちの故郷であっただけでなく、そこは、彼らの信仰の出発点でもありました。そこはイエスに出会い、イエスの弟子となって従いはじめた場所でした。ヨハネの福音書 21 章のはじめの部分を読むと、弟子たちは一晩中漁をしたが、一匹も魚がとれなかったとあります。ところが、岸辺に立っていたイエスのことばに従って、もういちど網を降ろしてみると、たくさんの魚がとれたというのです。実は、これとほぼ同じことが、弟子たちがイエスに従いはじめたころにも起こりました。その時も、弟子たちは一晩中漁をしたにもかかわらず、一匹の魚もとれませんでした。しかし、イエスのことばに従って沖に出て網をおろしてみると、網が破れるほどの魚がとれたのです。（ルカ 5:1-11）弟子たちは、この時から「何もかも捨てて、イエスに従った」のでした。この体験は、彼らの信仰の原点でした。「イエスのことばを心から信じ、従えば不思議なこと、驚くべきことが起きる！」イエスは、復活の後、弟子たちに、彼らが三年前に体験したのと同じ奇蹟を行われました。それは、彼らを信仰の原点に立ち返らせ、信仰を新しくさせるためでした。イエスは、弟子たちに再出発の機会を与えたのです。

さらに岸辺でイエスは、弟子たちのために炭火をおこして待っていました。それからイエスはパンをさき、魚をわけて、弟子たちと一緒に食事をされました。この食事について、学者たちは、これは「和解の食事」であると言います。つまり仲直りの食事ですね。古代では、人を食事に招くのは仲直りのしるしでした。しかし弟子たちはイエスを裏切り、見捨てました。そんな弟子たちをイエスは赦し、受け入れ、ここで「和解の食事」を提供しているのです。ふつう、和解の食事というのは、罪を犯した人が、「申し訳ありませんでした」と被害をこうむった人を招くものです。しかし、ここでは、弟子たちに裏切られ、見捨てられたイエスの方から和解の食事が提供されています。イエスのほうから弟子たちの罪を赦し、彼らを受け入れているのです。ここに、イエスの大きな愛と恵みがあります。この写真は、イエスが弟子たちと食事をしたと伝えられている場所です。

3. ペテロの回復

イエスは、弟子たちすべてに再出発の機会を与えてくださいましたが、弟子たちの中でも中心となるべきペテロには、特別の機会を与えました。それが、今日のイエスのペテロへの質問でした。食事の後、イエスはペテロに「ヨハネの子シモン。あなたは、この人たち以上に、わたしを愛しますか。」と問いました。「ヨハネの子シモン」というのはずいぶん、改まった呼び名です。ニュアンスとしては「父ヨハネのご子息シモン」という感じですね。彼はすでにペテロという名で知られていたのですが、ここでは正式な名前で呼ばれています。だれでも、こんなふうに呼ばれれば、立ち上がって、背筋を伸ばし、緊張して返事をしなければならなくなりますね。しかも「わたしを愛しますか」というとき使われていることばは

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。」（ヨハネ 3:16）というところで使われているのと同じことばです。大きな愛、真実な愛、献身的な愛、犠牲的な愛を指すのです。これは改まった言い方で親しみを感じないということではなく、責任をもって生きる一人の人格を最大に尊重して語りかけておられるということです。イエスは、ペテロに、真剣に「わたしを、こころから、命がけで愛するか。」と問いかけているのです。

イエスは、ペテロに同じ質問を三度繰り返しています。これは、もう、お気づきかもしれませんが、ペテロがイエスを三度否定したことに関係があります。ペテロは、最後の晩餐の席で「たとい全部の者があなたのゆえにつまづいても、私は決してつまづきません。たとい、いっしょに死ななければならないとしても、私は、あなたを知らないなどとは決して申しません。」（マタイ 26:33,35）と大見得を切りました。ところが、それから数時間もたたないうち、イエスが捕らえられて大祭司のところに連れていかれた時、ペテロは人々を恐れて、「私はイエスの弟子ではない。イエスなんか知らない。」とイエスを三度も否んでしまったのです。そのようなペテロに、イエスは、三度、「わたしを愛するか」と問いかけました。それは、ペテロを過去の失敗から完全に解放するためでした。ペテロが過去の失敗をいつまでも引きずらないで、前に向かって進み出すためでした。これは悔い改めの基本です。自分の罪を認める時に初めて神の赦しの恵みを体験することが出来ます。普通それを見るのが難しくて「あの人のせいでこうなった」とか「たまたまそうなったのであって本当の自分はそうでない」と言いがちです。つまり自分は罪とは無関係。しかし、それでは誰のための神の赦しか分からなくなるのです。そしていつまで経っても過去の失敗を引きずってしまうのです。

私たちの神は赦しの神です。私たちの聞いている福音は罪の赦しの福音です。しかし多くの人は過去の罪や失敗にいつまでもこだわり続けています。それは自分の罪のための赦しということが分からないからです。神が赦してくださっているのに、自分を赦していない人がなんと多く、神が受け入れてくださっているのに、自分を受け入れていない人がなんと多いことでしょうか。そこから解放されるために、私たちにはイエスのことばが、イエスの問いかけが必要なのです。

イエスは私たちにも「あなたはわたしを愛するか」と問いかけておられます。「あなたは、わたしにちゃんと従ってこられるか。あなたはわたしのために一所懸命働きますか。」イエスは、そんなことを問うておられるのではありません。イエスが私たちに求めておられるのは、私たちの立派さや能力ではなく、主を愛することです。

イエスへの愛を言い表わしたペテロに、イエスは「わたしの子羊を飼いなさい。」「わたしの羊を牧しなさい。」「わたしの羊を飼いなさい。」と言われました。それはつまりペテロが再び、十二弟子の中でリーダーとなり、教会に仕えることを許してくださったということです。今も教会に仕える人々が必要とされています。イエスは、教会の世話をすることを、イエスを愛すると言い表した人に任せています。教会の奉仕者には、何らかの技能なり力が必要でしょう。しかしその中でも最も大切なことは、イエスへの愛です。イエスへの愛が優先順位の最上級にきます。そしてイエスへの愛のゆえに、奉仕をする時それは決して重荷とはなりません。疲れません。奉仕がイエスへの愛を表わすためになされるなら、それはかならず実を結ぶものとなるのです。「イエス様、あなたを愛します。」そう言い表わして、教会に仕えましょう。